

第十二回全国藩校サミット行田大会 忍藩子ども塾・市立埼玉さきたま小合同素読教室

日時 平成二十六年七月五日(土)
場所 行田市産業文化会館ホール

木鐸ぼくたく



木鐸とは、手で振る鈴のことで木鐸と金鐸と二つあります。金鐸は金口金舌で武事に用いますが、木鐸は金口木舌で文事に用いました。木でこしらえた舌で叩くと軟らかい音がするのです。

約二千五百年前中国では朝廷で法令が出ると村の役人が木鐸を鳴らして村民を集め、法令を読み聞かせ周知徹底を計ったものです。このことから転じて教えを施して一世を指導する学者にたとえて「木鐸」と呼ぶようになりました。

※論語に「天將に夫子を以て木鐸と為さんとす。」があります。

○夫子は「孔子」のこと「論語」八佾第三

忍藩子ども塾で始業合図に使用している鈴は、二千五百年前の「木鐸」を現代の名工あかがね司、針生清司氏(群馬県館林市在住)が復元制作したものです。藩校教育を現代に活かす教育の実戦場としてある素読教室において、毎回、有用な人材がここから巣立つことを願いつつ使用させて頂いております。

忍城偶成
三百諸侯美風を競う
進脩の名古し武州の中
児童齊唱す先賢の句
看る可し郷賢化育の功

岳堂

春曉

孟浩然

春眠曉を覚えず
处处啼鳥を聞く
夜来風雨の声
花落つること知る多少

絶句

杜甫

江碧にして鳥逾白く
山青くして花然えんと欲す
今春看す又過ぐ
何れの日か是れ帰年ならん

江雪

柳宗元

千山鳥飛ぶこと絶え
万径人蹤滅す
孤舟蓑笠の翁
独り釣る寒江の雪に

鶴鵲楼に登る

王之涣

白日山に依りて尽き
黄河海に入りて流る
千里の目を窮めんと欲して
更に上る一層の楼

磧中の作

岑参

馬を走らせて西来天に到らんと欲す
家を辞してより月の兩回円なるを見る
今夜は知らず何れの処にか宿するを
平沙万里 人煙絶ゆ

江南の春
千里鶯啼いて緑紅に映す
水村山郭酒旗の風
南朝四百八十寺
多少の楼台煙雨の中

胡隱君を尋ぬ

高啓

水を渡り 復た水を渡り
花を看 還た 花を看る
春風 江上の路
覚えず君が家に到る

春望

杜甫

国破れて山河在り
城春にして草木深し
時に感じては花にも涙を濺ぎ
別れを恨んでは鳥にも心を驚かす
烽火三月に連らなり
家書万金に抵る
白頭搔けば更に短かく
渾べて簪に勝えざらんと欲す

子曰わく、学びて時に之れを習う、亦た悦ばしからずや
朋あり、遠方より来たる、亦た樂しからずや
人知らずして愠らず、亦た君子ならずや

子曰わく、巧言令色鮮なし仁

子曰わく、弟子入りては則ち孝、出でては則ち弟、
謹みて信あり、汎く衆を愛して仁に親しみ、
行いて余力あらば、則ち以って文を学ぶ

子曰わく、吾れ十有五にして学に志す。
三十にして立つ。四十にして惑わず。
五十にして天命を知る。六十にして耳従う。
七十にして心の欲する所に従つて、
矩を踰えず。

孟武伯、孝を問う。子曰わく、父母は唯其の疾を之れ憂う。

子曰わく、父在せば其の志を觀、父没すれば其の行いを觀る
三年、父の道を改むること無きを、孝と謂うべし。

江南の春

杜牧

千里鶯啼いて緑紅に映す
水村山郭酒旗の風
南朝四百八十寺
多少の楼台煙雨の中

胡隱君を尋ぬ

高啓

水を渡り 復た水を渡り
花を看 還た 花を看る
春風 江上の路
覚えず君が家に到る

春望

杜甫

国破れて山河在り
城春にして草木深し
時に感じては花にも涙を濺ぎ
別れを恨んでは鳥にも心を驚かす
烽火三月に連らなり
家書万金に抵る
白頭搔けば更に短かく
渾べて簪に勝えざらんと欲す

子曰わく、由汝に之れを知ること誨えんか。之れを知るを
之れを知ると為し、知らざるは知らずと為せ。是れ知るなり。

子曰わく「其の鬼に非ずして之れを祭るは諂ふなり。」
義を見て為さざるは勇なきなり。

子曰わく、朝に道を聞かば、夕に死すとも可なり。

これより三章

子曰わく、学びて時に之れを習う、亦た悦ばしからずや
朋あり、遠方より来たる、亦た樂しからずや
人知らずして愠らず、亦た君子ならずや

子曰わく、巧言令色鮮なし仁

子曰わく、吾れ十有五にして学に志す。
三十にして立つ。四十にして惑わず。
五十にして天命を知る。六十にして耳従う。
七十にして心の欲する所に従つて、
矩を踰えず。